

序

章

一九九一年四月、私ははじめて佐野市郷土博物館へ行った。田中正造の遺品を見たかったからである。正面玄関を入ってすぐの特別展示室に正造の像が立っていた。私はなぜかその足元ばかり見つめた。しばらくは顔をあげられなかった。像はパンフレットによれば河西昭治作とある。もとより私は偶像を崇拜する者ではない。ただ事実として足元ばかり、じっと見てしまったのである。

遺品の合切袋（信玄袋）とその中のものが展示されていた。小石三個。手のひらによくなじむ位の大きさで、表面がつるつるしているように見えた。小石に正造は悠久の自然を感じとっていたのだろうか。他にはかわいい絵柄の小学生用のノートを使った日記帳三冊。絶筆となった箇所が開かれていた。「悪魔を退くる力なきものゝ行為の半ハ其身も亦悪魔なればなり。已ニ業ニ其身悪魔の行為ありて悪魔を退けんハ難シ。茲ニ於てさんげ洗礼を要す。さんげ洗礼ハ已往の悪事ヲ洗淨するものなればなり。何とて我れを」それと河川調査の草稿。「苗代水欠乏 農民懷食せずして苦心せる時、安蘇郡、及西方近隣の川々細流巡視及其途次に面会せし同僚者の人名略記内報其一号書」という長い題名がついている。新約聖書一冊。それと馬太伝と帝国憲法を白糸で綴じあわせた合本があった。袋にはその他鼻紙少々、取ったままの川海苔もあったそう⁽¹⁾だ。

私はこれら遺品のなかで新約聖書とマタイ伝に注目したい。

田中正造が初めて新約聖書を読んだのは明治三十五年（一九〇二）七月、服役中である。

入獄中病室に居る二十余日、新約三百ページを一読せり。得る処頗る多し⁽³⁾。

正造はその年六月十六日から七月二十六日まで奥鴨監獄に服役している。明治三十三年（一九〇〇）十一月、川俣事件の公判中、検事論告に憤慨して欠伸をしたことにより官吏侮辱罪に問われその刑に服していたのである。この四一日間正造が「幼な子」へと成長するターニングポイントとなる。聖書を差しいれたのは内村鑑三ではないかという説⁽³⁾もあるが定かではない。ともかく、キリスト教が正造の生涯に大きな意味を有するに至る端緒がここにあったのである。

なお、遺品となった革表紙の新約聖書と監獄で差しいれられた新約聖書とは同じものではないらしい。林竹二によると、遺品となった新約聖書は「かなりあとになって手に入れたもの」のようで、「はじめは、彼は小さな紙表紙の分冊の、マタイ伝一冊を、憲法と綴り合わせて持って歩いてい」たそうである。吉田という牧師が、それを見て、それでは不便でしょうから新約全書をあげましょう、と言ったという話も紹介されている。さらにつけ加えれば正造はその時「私はこのマタイ伝の一節でさえもまだ実行できないであります。全書をいただいても無駄です」と答えたそうである⁽¹⁾。田中正造の面目躍如といったところであろう。

正造は、そんな時間もなかったが、教会に行っていないし、洗礼も受けていない⁽⁵⁾。けれども、林は正造を「クリスチャン」であると言う。その是非は今はおいておくとしても、たしかに正造はキリスト教の影響を色濃く受けている。特に最晩年のキリスト教理解には目を見張らせるものがある。正造という人間の再創造あるいは再生かと思わせるような精神の深化が見られる。

ところで、正造のキリスト教に大きく関与したのが新井奥造その人なのである。われわれにそれを教えてくれたのは林竹二である。林によって奥造は漸くわれわれの前に立現われたといえるであろう。ただ、奥造の正造への影響の内実、たとえば奥造のキリスト教理解と正造のそれとの相異をもっと具体的に検証する必要はあると考える。正造の日記、書簡などを見ると、これは奥造のキリスト教そのものだと思える箇所と、正造ならではのキリスト教理解だと思える箇所とがあるのである。また正造のキリスト教理解の深まりのプロセスにも着目せねばならぬであろう。

ただ、それらを明らかにすることが本書の目的ではない。今は若干の結論めいたコメントだけに限りたい。正造のキリスト教はその最晩年に至り奥造のキリスト教と比肩しうるものとなった、と考える。

小中村の衰頹は正造の罪多きに居ると同時に、日本の亡國に陥りしも亦正造に罪多し。凡そ人類として、責任として免れざるは社會の細大皆我身の關せざるなし⁽⁶⁾。

これは正造死去の年大正二年（一九一三）一月の手紙である。また、死の一日前の手紙も見よう。

正造の三十余年へ実ニ残忍なる反響、同志殺し、朋友殺し、親戚殺しの反響、何んのためニ他人ニ損さずるも、其罪己れのちから、及さとの到らざるありです⁽⁷⁾。

正造はこのような魂の深化あるいは聖化を谷中の苦闘を通して自ら学びとった。より正確にいえば、おそらく恩寵によって知らしめられたという内実を有するものとして、自ら学びとった。学びとらされたものとして学びとった。この地点より見れば奥造の影響の下、奥造の播いた種がようやく開花結実したともいえよう。しかし、それはあくまで結果である。正造は正造のプロセスを通して奥造に匹敵する境地まで高まっていったのである。

しかしまた、そのプロセスに奥遼がかかわっていないというのではない。ただそのかわりの内実をもっと深く探究する必要があると考えるのである。

たとえば正造と岡田虎次郎との関係を正造と奥遼との関係にどう位置づけ切り結べばよいのであろうか。最晩年の正造、そこにこそ「クリスチャン」正造の真髄があるとすれば、その最晩年において正造にとっての岡田は無視することのできない存在であると考え⁽³⁾る。

しかし、本書の目的は、正造に「思想的に革命的な影響⁽⁹⁾」を与えた、また「田中正造の思想の魂のお師匠さま⁽¹⁰⁾」であるという新井奥遼の人と思想をその教育観、宗教観を中心に探究することにある。

新井奥遼から影響を受けたのは田中正造だけではない。礫山荻原守衛、野上彌生子にもその痕跡をとどめている。けれども影響として印象深いのはやはり高村光太郎である。光太郎の研究で知られる北川太一がかつて『日本古書通信』に「光太郎の愛読書 新井奥遼の『読書談』」と題して小文を発表している。そこに引用されている光太郎の手紙を紹介したい。光太郎をしてここまで言わしめるものが奥遼にはあったのである。

餘程以前に君から新井奥遼の「読者讀」の一篇を恵まれた事がありました。それから後僕は此の黒い小さな書を常に身邊に置いて殆ど何百回か読み返しました。そして此頃になつてだんだん本當に翁の言が少しづつ解つて来た様に思はれます。其は意味が解つたといふので無しに僕の内に望む處と翁の言とがますます鏡に合せる程一致して来たのを感ずる様になつたのです。それで尚更愛讀して自分の勇氣をやしなはれてゐます⁽¹¹⁾。

奥遼の門下、柳敬助宛の書簡である。

本書は二篇より成る。第一篇は人物篇とし、奥遼の少年時代より死までを彼の思想と関連づけながら考察する。第二篇は思想篇とし、彼の「新生」あるいは「再生」という思想を中心に、その教育観、宗教観を明らかにしたい。

注

- (1) ベンフレット『常設展示解説 佐野の歴史―原始から近現代へ―』（佐野市郷土博物館、平成二年三月三十一日）
- (2) 明治三十五年七月二十七日原田定助宛書簡『田中正造全集』第二五巻（吉坂書店、一九七八年）四四五頁。
- (3) 島田宗三は「内村鑑三かもしれない」と述べている。林竹二『田中正造その生と戦いの「根本義」』（田畑書店、一九七七）一九九―二〇〇頁。
- (4) 林竹二、同上書、一〇三頁。なお林はその語を永島与八の文章より引用したものと思われる。永島与八『鉅毒事件の真相と田中正造翁』（明治文庫、昭和四十六年）六四一頁に同様の話がある。
- (5) 明治三十九年（一九〇六）五月二十日原田定助宛書簡に「正造を近日中ニ洗礼ヲ受ケント祈リ居候」とある。『田中正造全集』第二六巻、四八二頁。
- (6) 同、第一九巻、二二五頁。
- (7) 同、二八二頁。
- (8) 正造が岡田と初めてあったのは明治四十三年八月である。明治四十五年一月までに二、三回静座に出席している。明治四十四年（一九一一）一月の日記には岡田のことを「人と云へんよりむしろ神なり」といっている。
- (9) 黒沢西蔵「田中正造を語る」『講演』二二六号（尾崎行雄記念財団、昭和四十三年一月）一四頁。
- (10) 同、一五頁。
- (11) 『日本古書通信』第三七巻六号（日本古書通信社、昭和四十七年六月十五日）一頁。
- (12) 『高村光太郎全集』第一四巻（筑摩書房、昭和三十三年）四四頁。

この大和会のメンバーである中村秋三郎は谷中村不当買収価格訴訟の控訴審の弁護士である。明治四十五年（一九一二）六月三日、師奥遼によって田中正造に紹介され、誰も引き受け手のいなくなった控訴審の弁護を務める。田中の死後六年を経た大正八年（一九一九）八月十八日の勝訴結審まで八年にわたり無償でこの難かしい訴訟に当たる。厳しい生活が災いしたのであろう。大正九年に長男を亡くし、自らも結審後三年を経た大正十一年五月十七日にその波瀾の生涯を閉じている。さらに一家はつづいて夫人も長女も病歿するのである。この中村秋三郎の凄絶な生き様から新井奥遼という人間が逆照射されるようである。

五 田 中 正 造

田中正造はこれまであげてきたような奥遼門下ではない。しかし林竹一も指摘するようにこの両者には深い内面的な交流があった。「交わり」があったといってもよい。ではその田中から見て奥遼とはいかなる人であるか。

林は、奥遼にとっては正造は十三年間を通じて不変であったろうが、正造にとっては奥遼は次第により深い奥底の現れてくる不断に新たになる人であったろう、と述べている。

田中ははじめ奥嶋の奥遼のもとで論語を教わっていた。田中を奥遼に紹介したのは巖本善治であらう。二人の出会い、明治三十四年（一九〇一）であったことはすでに述べた。官吏侮辱罪で服役中、聖書を読んでからは、七月、九月の周

それ以降の上京の際、奥遼のもとで、定例の日曜日の講義日以外の日に、聖書の講義を受けた。その時には黒沢西蔵も同伴したことがあった。黒沢は「私の聖書の手ほどきは新井先生です」と言っているが、おそらく正造も同じであらう。黒沢は十回位聴いたと記している。

田中の明治四十五年二月の日記に十年前を想起しながら書かれた文章がある。

三十四五年の頃、新井奥遼氏、予を見て神経病なりとして之をさとせり。よりて精神落付たり。然れども当時何んのために落付きたるやをべしらざりしなり。（中略）然るに精神の寧靜に期したるへ、即ち新井先生の御蔭げたるへ、他年二到りて漸くさととりしなり。此くの如く高尚の救へばとりがたく、他日他年二渉りて漸くしれべきものありとするも、当時二ハ意得し能わざる事多し。

十年を経て田中は奥遼という人間を理解したということだろうか。その十年、すなわち直訴後の精神の空白、聖書との出会い、奥遼による聖書の手ほどき、そして谷中村の苦闘、それらを経て、ひとりの人間がひとりの人間を知るに至ったということであらう。

田中正造は奥遼もいうように「嬰兒の精神」を有していた。天国に入れる人であった。日記にこんな文章がある。

四月十九日 奥嶋千四七番ち新井奥遼様方止宿。（中略）七十年ニして朝寝を誡めらる。

その後田中は発奮して早起を実践している。明治四十四年六月の日記には一度ほどその努力を記している。まさに「嬰兒の精神」である。

その田中が奥遼について記す。

「久々に新井奥遼氏を訪ふて泊す。巨介となる。安眠す。殆んど深山に寝たる如し。清風靜かに身辺和らかに神心清きを感じ。」何の説明も要しないであらう。翌日には再び奥遼の印象を書いている。

新井奥遼氏と面す。一泊巨介を得て親くし長時間を対話する如くも、一物の存するなきが如し。只何事か心清まりて高尚にすくむを覚ゆ。之れ神のめぐみの。

永島忠重が某の言葉として記した「家の中が神聖にされた如き感じ」あるいは「家の中の空気が違つたやうになる」という奥遼観と共通のものを田中も有していたといえよう。

新井興遠はキリスト者である。彼は洗礼を受けていないものと思われる。按手礼ももちろん受けていない。教会にも通わない。しかし彼はイエスをならう者としてキリスト者である。興遠にならえば、イエスという道を自らの程度に応じて歩く者としてキリスト者である。彼のキリスト教理解については思想篇で詳しく探究したいが、ここでは人物像のまとめとして、十字架を中心として若干の考察を試みたい。何故なら人間としてのイエスは十字架の上において頂点に達すると思われるからである。

人間イエスの最高の業は、執りなしの祈りにある、と考える。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」これが執りなしの祈りである。自分を迫害する者のために、罪なき者が迫害する罪ある者の罪を赦してくれるように神に執りなすのである。迫害する罪ある者とは私たちすべての人間、いや私のことである。私のために罪なき者が神に私の罪の赦しを執りなしてくるののである。その意味で執りなしの祈りを真に遂行できるのは神の子イエスただ一人である。しかし、私たち罪ある者もイエスキリストの十字架によって赦されたものとなって、罪はあるのだが罪が認められない者として、他者のいや隣人の罪の赦しをイエスキリストを通して神に執りなすことができるのである。隣人の罪を自らの程度に応じて担う者として神に執りなすのである。自ら他者の隣人となる者にとってはすべての他者は隣人である。完全な執りなしの祈りはキリスト

イエスにおいてしか可能でない。けれどもキリスト者として、イエスをならう者として、自らの程度において執りなしの祈りを祈ること、それがキリスト者としての最大かつ至高のことであるように思われるのである。興遠の「奉禱」にはまさにそのような執りなしの祈りが無いであらうか。イエスをならう者としての興遠に一人の真正のキリスト者を見るのである。

なお、執りなしの祈りと贖罪との関係について附言したい。

執りなしの祈りは純粋にはイエスキリストの祈りであったが、人間イエスの祈りとして私たちにも程度に応じて与かることの可能な祈りであった。もちろん、それが可能となったのはイエスの十字架上の死、贖罪があったからであった。

一方、贖罪は純粋に神の業であり、神としての神の子の業であり、私たち人間には絶対に与かることのできない業である。それゆえ、もし人にして贖罪をなしうと考える人、実行せんとする人は、人にして神にならんとする人であり、それはキリスト教とは何の関係もない人である。いや彼こそ最大の罪人であらう。

興遠は執りなしの祈りを為す人であり、自己の罪の深大さを知悉していた人であり、神の領分には一步も足を踏みいれない、否、踏みいれようなどとは思ひも及ばない、敬虔なる一人のキリスト者である。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という教えは執りなしの祈りにおいて成就される。

また、善い行為(業)は信仰の結果であるが、執りなしの祈りにおいて信仰と業は合一する。そこにおいて罪人にして義人である私たちの最大至高の行為と最大至高の信仰とがあるように思われるのである。

それは神に対し何ら誇るべきところのない罪人である者が、神の愛によって贖われ生かされていることを知るがゆえに、今度は自らが羊(犠牲)となって罪人の救われんことを神に祈るのである。神によって与えられ教えられた愛を神に感謝し、その愛に応えるために為される愛の業といってもよい。

七十数年前、東京の一隅で人知れず、人類のために、私たちのために、私のために折っている人がいたのである。

が氣でありませぬ、病床につききりでございます、先生は寝返りする力さえないのでございます。

先生の肉體の變化が参りまして先生の清明なる魂はいつもわたくし達と偲にあります。

八日午後五時

ここにもまた壯絶かつ真摯な弟子がいる。もとより命を賭ける弟子がたくさん居たとしても、それで師が優れているというものではない。新興宗教の教祖にも命をかける者はいたし、今もいるであろう。かつての天皇は何百万人ものそういう人を有していた。結果的にそうってしまった人も^教に上げられないほどいたにちがいないが。

とはいえ、人がその生命をも賭けるということはただ事ではない。奥蘆に則していえば、やはりそうしうるもの、そうせざるをえなくなるような何ものかを奥蘆という人間は有していたものと思われる。

枕辺から遺書とともに発見された「奉禱」のあったことは先に述べた。それは大正十一年（一九二二）五月、すなわち死去の前月の大和会において会説のため提出された文章の中に「八九年前に大故あり、予は既に非常の死を神に禱る。細書して之れを枕上に置く。一字一句日夜訂正して妥當を吾が心に求む。此の如くするもの二三年、全紙烏墨となり殆ど自ら讀む能はず。乃ち一夜深更自ら淨寫して以て納む。事は専ら神と予とに係る。中略蓋し祈文は則ち事専ら予と神との機密に係るもの、必ず世に公にする所以の者に非ざるなり。之れを見る者（予の死後）當に之れを心すべきなり。後略。」と書かれてあった当のものなのである。永島もこれを公にする時、大いに迷ったことであらう。

ここに書かれある八、九年前とは第一次世界大戦の時である。あの大量殺戮が奥蘆のような人間をどれだけ苦

しめその壽命でさえも縮めてしまうことであつたらうことは想像するに難くない。

「奉禱」の全文を引用する。

二 奉 禱

+ ⑩

嗚呼父母上ヨ我等ノ罪ヲ赦シ給ヘ

+

我が罪大ニシテ深シ我が心ハ震動シ我が意ハ困憊ス其ノ痛ヲ極メ頭腦明ヲ見ル能ハズ

+

神ノ福祉其ノ感余ニ於テ今遠キガ如シ余ガ罪誠ニ大ナリ祈ラント欲シテ祈ルニ力ナシ願ハント欲シテ心深く入り難シ噫々是レ何ノ狀ゾヤ

+

我等ノ心ハ不良ナリ我が性ハ死セリ

母上ヨ父上ヨ嗚呼我等ノ神ヨ

+

我等今實際ニ父母上ノ御家ニ於テ壞亂ノ罪ヲ暴犯シツノアリ

+

神ノ子女ヲ無數ニ殺戮ス如何ゾ震怒ヲ免レンヤ

+

世界ノ悲惨其ノ責誠ニ予ガ身ニ在リ斯ノ予ガ身ニ在ル責ヲ世ハ知ラス唯我ガ父母神ノミ之レヲ知り給フ

+

我ガ罪深シ十刑萬死ニ當ル

+

若シ予ガ刑ニ因リテ他衆ノ罪ノ一小部分ヲモ輕減シ得バ亦誠ニ余ガ幸福ナリ

+

罪惡ノ身敢テ祈ル所ヲ知ラス然レドモ御旨ノ此ノ地ニ大全ヲ成サンコトヲ敢テ祈願シ奉ル

+

父母上ヨ嗚呼我等祈ル所ヲ知ラス

+

我等ハ己ガ良心ヲ撃退シテ其ノ正覺ヲ失ヘリ我ガ罪大ナリ

+

他人ノ罪モ亦誠ニ我ガ罪ナリ世界ノ悲嘆骨髓ヲ通シテ予ガ身ニ滲參ス予ガ罪十刑萬死ニ當ル

+

嗚呼神ノ子女ハ殺サル悲惨世界ニ互ル兄弟姉妹無數ニ害虐セララル又害虐セラレツノアリ其ノ責誠ニ我ニ在リ

+

噫々敢テ言上ス之レヲ殺ス者ハ畢竟我ナリ

+

他人ト自己トヘ一ナリ皆兄弟ナリ同シク父母神ノ子供ナリ然ルニ予等不孝斯ク殘忍暴虐至レリ誠ニ悲ニ堪ヘズ

+

是レ誠ニ予ガ罪ナリ彼等ノ罪ハ我ガ罪ナリ而シテ我ガ罪又彼等ニ歸ス我ガ罪至大ナリ我ハ他ヲ棄テ、獨リ逃ルハ願ハズ

+

願ハクハ予ヲ誅シテ萬民ヲ赦シ給ハンコトヲ敢テ萬民ニ代ラントスルニ非ズ是レ誠ニ予小子固有ノ分ナリ

+

萬民赦サレテ而ル後神ノ赦亦我ニ及ベン而シテ乃チ皆々己ヲ虐フシテ新ニ聖體ノ光明ニ覺ムルヲ得ン

+

嗚呼貴神大父母ヨ神ノ天地ノ再新ノ爲メニ我ヲシテ罪人ノ死ヲ主上ニ於テ死セシメ給ヘ願ハント欲シテ此ノ身噫今其ノ力ナシ

一千九百十四年記 一千九百十八年自寫 不孝子

- 200 工藤正三『英文学史よりみた新井奥達』(日本英文学会会報、第七五号、七六号)。
 201 同『新井奥達をめぐる人びと』(一)―(五)『地域史学』(1)―(5)。
 202 同『新井奥達覚え書き・安藤昌益と奥達』(一)―(六)『Biblia』21号―25号、一九九二―一九九五年)。
 203 土屋博政『トマス・レイク・ハリスと母なる神』(英語英文学『NO』20、慶応大学日吉紀要、一九九三年三月)。
 204 同『新井奥達と「失敗の成功」』(同『NO』21、一九九三年八月)。
 205 小松裕『田中正造―十二世紀への思想人』(筑摩書房、一九九五年)。
 206 花崎肇平『田中正造の思想(上)』『世界』第四六〇号、一九八四年三月。
 207 同『解説』『田中正造選集』第六卷(岩波書店、一九八九年)。
 208 鈴木範久『内村鑑三日録』第二卷―第八卷(教文館、一九九三年―一九九五年)。
 209 The Greek New Testament, United Societies, 1983。
 210 上田薫『上田薫著作集』全一五巻(黎明書房)。
 211 工藤正三監修『奥達先生資料集』全六巻(大空社、一九九三年)。
 212 ダンテ著、山川内三郎訳『神曲』(笠倉社書店・復刻版、大空社、一九九三年)。
 213 富田光雄『万人救済説の系譜』『福音と世界』一九八九年六月号、新教出版社。
 214 同『予定説と万人救済説―宗教改革者、内村鑑三、カール・バルト―』『思想』一九八九年八月号、岩波書店。
 215 土井晩翠『雨の降る日は天気が悪い』(大雄閣、昭和九年)。
 216 宮崎安右衛門『無身の生活』(一如書房、昭和十年)。

あとがき

新井奥達は人前で祈らない。聖書も講じない。写真も撮らせない。

奥達は深く祈る人であった。ただ人前では祈らないのである。それは「信仰のみ」が有する陥穽をよく知っていたからであろう。「信仰のみ」それも「正しい信仰のみ」が他者を断罪する根拠となるからである。

奥達は聖書を講じない。愛を講じない。愛は愛することをもって足る。それ以上でもそれ以下でもない。聖書はそれを教えている。そのことを忘れないための書なのである。

奥達は写真を撮らせない。「こんな不潔なる身體を寫して何の爲になるのです、寫すならば心を寫したら善いでせう」(『面影と其の談話』)と言う。写真は奥達の心までは写すことはできないのである。また写真はそれを見る時はいつも過去のものである。「一日の懷舊は十日の逆行を來た」すと奥達は言う。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくなり」ということであろう。奥達によれば写真は、神との関係に隙間やずれが生じた時に出現する「滑生氣」を生むものなのだと考える。

奥達が自ら誅し「友」にも教えた(深い祈りを底に宿して)ことは、「言に枕することのない」生であった。イエスは神に、「事へ」人を愛した(愛苦)。そのときイエスは「父に棄てられたる子」であり、「自ら起つ」とによって復活した。それはまた「母の聖靈なる火」によって暖められ、扶けられたことによって成ったもので

もあった。その「父母神」によるイエスの生と死と復活の愛の業を「倣う」者となること、「基督の志願奴隷」となることが奥遼自身へのまた「友」への祈りであり業であった。ここに「一道也。一根也」としての奥遼の宗教と教育とがある。

キリストによって、人に事へ、人を愛するのである。そのために自ら（「慾慾」）を十字架につけるのである。「友」のために死ぬのである。「一粒の麦」となるのである。その落下と結実に奥遼は「新生」ないし「再生」を見る。「有神無我」とはその「再生」した人、「再生」せんとする人の謂である。その「有神無我」なる「一粒の麦」に人類と世界の「再生」と「大和」のあることを奥遼は遠く千年のまなざしの中に見ているのである。教育もまたその千年のまなざしの中の営みである。

「首に枕することのない」「基督の志願奴隷」は神の救済の業に参加（奉仕）する。「大救としての大終」として在る「審判」にすなわち人類と世界の「再生」の業に、大いなる信仰と大いなる希望とをもって参加するのである。

新井奥遼を知ったことは幸せであった。それによって私の人生も変わった。ひとつの選択に恵まれた。しかし、これからも私の「程度」に応じて、より深まりを見せる人であろう。

奥遼を紹介くださったのは、鈴木範久教授である。爾来、かすかすの御教示をいただいている。この度の出版に際してもたいへん御世話になった。学恩に深く感謝申し上げたい。

「新井奥遼先生記念会」幹事、工藤正三氏にもお礼申し上げたい。「記念会」でのお話し、Biblia.を中心に

発表された論文、資料に大いに学ぶことができた。その「記念会」で知った、清泉女子大学の小野寺功教授の親切な御教示にも感謝申し上げたい。またペリカン書房店主、品川力氏からは貴重な資料の提供を受けた。お礼申し上げる。その他いろいろお名前はあげないが「記念会」の方々には、いろいろとお世話になっている。御礼申し上げたい。

また、立教大学大学院での教育学専攻の先生方にも感謝の意を捧げたい。今日、このような本が成ったのもあの楽しく充実した日々のおかげである。

新井奥遼研究はまだ緒についたばかりである。各方面からの研究が待たれる。小書がこれからの研究の橋頭堡となることができれば望外の幸せである。

最後になったが、単独の著作としては初めての本を大明堂より刊行できたことは大きな喜びである。編集者の近藤達也氏にはお世話になった。感謝の意を表したい。

一九九五年十月二十五日

播 本 秀 史

新井奥邃略年譜

- 一八四六（弘化三年）丙午 一歳
陰曆五月五日（午月午日）午刻。仙台元機町に生まる（陽曆五月二十九日）。常之進安静と命名。父（四九歳）は藥種商^①（景服商）より武士となった人。母（三九歳）は花唄（太平洋の浜）の寒村生まれ、男勝りの気尚者でかつ至って几帳面な質。兄三郎助安方（二三歳）、姉（不明）。
- 一八五二年（嘉永五年） 七歳
藩校養賢堂に入学する。
- 一八五四年（安政元年） 九歳
兄（二二歳）、養賢堂の「為兵学助教」となる（七月二十八日）。通称「静好先生」と呼ばれる。
- 一八五九年（安政六年） 一四歳
兄（二六歳）、阿部氏より妻を迎える。父、三郎左衛門安信死去（享年六二歳・五五歳の二説あり^②）。
- 一八六一年（文久元年） 一六歳。
甥一郎生まれる（二月十四日）。兄三郎助安方死去（八月十五日）（享年二八歳）。ニコライ、領事館付司祭として箱館に来航（五月二十五日）。
- 一八六三年（文久三年） 一八歳。
麻疹に罹り、五四日間床に臥す。
- 一八六四年（文久四年・元治元年） 一九歳。
新島襄、沢辺孫磨とニコライの助力で箱館より日本脱出（六月十四日）。
- 一八六六年（慶応二年） 二一歳。

江戸遊学を命ぜられる。八月初旬仙台出発、八月十八日江戸着。昌平學に入學するも期するところあって八月二十二日に安井愚軒の三計塾へ移る。

一八六七年(慶応三年) 二三歳。

大政奉還(十月十三日)

一八六八年(慶応四年・明治元年) 二三歳。

一月、鳥羽伏見の戦い起こるや三月十日頃帰仙し、玉虫左太夫を扶け奥羽越列藩同盟の結成に奔走。玉虫左太夫、若生文十郎らと米沢、会津に向かう。「軍務局議事応接方御用御小姓之間話」を命ぜられる(三月か五月)。

榎本武場の墓遊仙台(寒風沢)港に入港(八月二十六日)。

仙台落降伏(九月十三日)。金成善左衛門らと共に脱藩。星岡太郎の仙台藩領兵隊に加わり箱館へ向かう(十月)。玉虫左太夫も一行に加わる予定であったが、追手の探索に捕えられ明治二年四月九日仙台の保善院で斬首された。

一八六九年(明治二年) 二四歳。

奥達、金成より沢辺に紹介される(一月初旬?)。沢辺、奥達をニコライに会見させる(一月末?)。奥達、ニコライと三回会見する。ニコライに正教についての文章を示す(二月初め?)。

ニコライ一時ロシアに帰国(二月)。金成と共に榎本、大島に「官軍と対抗するため、募兵の要」を建議する(二月末か三月初め頃)。

プロシヤのラック船に便乗して仙台に向かうが、約束に反す。よって一漁船に救いを求め房州大房浜に上陸する(二月二十日か二十七日)。

奥達と金成はひそかに仙台に帰る(四月二十五、六日頃か)。菩提寺金玖院に潜伏するも募兵の不可能なこと、逮捕斬首の危険を感じ仙台を脱出する(四旦末か)。

再び房州に帰り、平郡青木村、医師鈴木周平宅に潜伏する(四月末か五月十一月中旬)。金成は庄内藩に向かい、そこから更に東京に逃れる。

青木村を引きあげ、再び仙台へ帰る(十一月二十七日)。この頃は探索の手も緩んできていて奥達は翌年一月十六日まで自宅に滞在する。仙台にキリスト教の種がまかれる。高野、小野らにキリスト教を説く。

一八七〇年(明治三年) 二五歳。

正教の奥義を究める目的で函館に向け仙台を出発(一月十七日)

奥達、沢辺の書簡仙台の同志に届く。奥達の真意は来函を急がせるものではなかったが、同志続々と来函するようになる。生活に窮して沢辺が信仰の集まりを守るため妻を売ろうとした話まである。

奥達と小野庄五郎は同志の生活費調達のためおよび同志を募るため仙台に向かう(十月頃か)。その頃、おそらくは金成より上京せよとの書簡を受けとっていたのかもしれない。仙台に着いて後すぐ奥達は東京に向かう(十月)。

金成の紹介で森有礼と会う(十月)。

米國郵船クレート・リベリック号に搭乗して、森一行とともに米國へ出航する(十二月三日、新暦一八七二年一月二十八日)。

一八七一年(明治四年) 二六歳。

十二月二十七日(一八七一年二月十七日)付、サンフランシスコよりの一郵便書簡。

ニコライ司祭、ロシアより函館に帰る。新暦二月十五日。以下の日付は新暦。奥達、森に伴われてプロクトンに到り、ヘリスの「新生社」に入る(三月十二日)。

一八七五年(明治八年) 三〇歳。

ヘリスの「新生社」が加州サンタローザへ移住する(二月)。フアウンテンクロープと名づける。

一八八三年(明治十六年) 三八歳。

五月十六日、母辰死去(享年七十六歳)。甥一郎よりの書簡で知る。

一八九二年(明治二十五年) 四七歳。

ヘリス、加州を去りニューヨークに帰る。ヘリス去りてより奥達はフアウンテンクロープより十マイル離れた深林中の山荘「リンリウ」に在りて独居生活を続ける。

一八九五年(明治二十八年) 五〇歳。

一八九六年(明治二十九年) 五一歳。

この二年間に英文による執筆多し。

一八九七年（明治三十年） 五二歳。

詩人エドウィン・マークムの紹介で野口米次郎、興遠を訪ね、夜を徹して話す。

一八九九年（明治三十二年） 五四歳。

八月一日「二枚の下着も」持たないで飄然として単身、三〇年ぶりに帰国する。謙和舎に入居する（一九〇三年・明治三十六年）まで東京を点々と移住する。上陸後直ちに上京、富田鐵之助を訪ね、夕刻下谷根岸の塀一郎宅を尋ねる。一郎宅（一郎は台湾に出立して不在）で病（船中で感染かマラリアのような熱病）を得、仙台出身の医師狩野謙吉の診察を受ける。それから浅草仲町の狩野の家へ移り、一、二ヶ月客となる。その後、元台湾高等法院長の高野正矩の角舎の家に寄寓する。

角舎を出て暫くの間四ツ谷辺にある知人の家に寄食、それから泉氏の紹介で明治女学校長藤本善治を知り、滝野川の谷に楓寺という寺の難れを借りて一人の青年と住む。暫くして西ヶ原の昌林寺にその青年と移り住む。しかしその青年が何かの事情で郷里の富山に帰ったので、興遠はひとりその附近の農家の座敷を借りてそこで自炊をする。流寓の生活の極まで後年「手も足も出す事が出来なかった」と追憶した時のことである。なお、それでも「今よりも幸なものでした。」と綴って述べている。

その後、板橋に近い字軒家という所に移り、四、五人の学生と一緒に住むが、そこも家賃が払えず解散する。それから巣鴨の庚申塚に移り、二、三人の少年を預って、食事の世話までしていた。田中正造が訪ひ『論語』の教を聞いたのも、中村木公が英語を習いにきたのもここである。それから木公と相談し、大塚辻町へ移り二人で同居する。それからいよいよ謙和舎に移るのである。

一九〇〇年（明治三十三年） 五五歳。

永島忠重（当時三〇歳） 滝野川・楓寺に寄寓の興遠を初めて訪問する。信州安曇野の井口豊源治、萩原守衛を伴い興遠を訪ねる（七月）。

一九〇一年（明治三十四年） 五六歳。

内村鑑三『聖書之研究』（第八号）に興遠を紹介。興遠も八号、九号、一〇号に一文を寄稿する。田中正造、巢鴨の書店を訪ね興遠とはじめて会う（九月）。時に正造六一歳。その年十二月十日、正造、天皇に直訴する。この行為を擁護し、

直ちに「過を觀て其仁を知る」の一文を寄す（雑誌『日本人』明治三十五年一月号所載）。

一九〇二年（明治三十五年） 五七歳。

『讀者讀』（小関太平治編）政教社より出版さる（三月）。『光瀾之觀』（原漢文）を印刷に付し配布する。

十一月十七日。田中正造と足利古春館にて演説。翌日、山辺、御厨村など渡良瀬川被害地を視察。

中村千代松（当時三五歳）巢鴨庚申塚に興遠を訪ねる（千代松、木公の記憶では十月）。興遠は二学生と同居中。

一九〇三年（明治三十六年） 五八歳。

小石川・大塚辻町へ二学生と共に移住⁽¹⁾。中村千代松も入居する。この頃、布施現之助も入居し、その妻小中村秋三郎もこれに続く。

八月、横浜の平沼延次郎来訪。かつて長男米國留学中、興遠より恩義を受けた礼。塾舎建設の義起り、平沼氏の援助を受け、巢鴨・東横寺の所有地に着工する。敷地として二王二百坪を借用、その大半を耕作地にする予定。

十二月三十一日。興遠ひとり未完成の謙和舎に移る。※「十二言」執筆。

一九〇四年（明治三十七年） 五九歳。

舎生として二十数名の学生を収容可能⁽²⁾。秋田県出身者が多い。毎週日曜日『論語』等を講ず。二月、ロシアに対し宣戦布告。興遠大いに深慮する。七月、田中正造谷中村に入る。

※『信感』（一）（二）（三）。このうち講話の筆録多し。

一九〇六年（明治三十九年） 六一歳。

三月、ヘリス翁（七四歳）他界。五月、函館行。

十一月より「大知會」が発足。毎月第一日曜日に集まる（舎生は毎月第二日曜日）。会員は十人内外。

自ら執筆の「語録」を毎月発行、配布する（この年十二月より明治四十四年十月まで継続）。百部から百五十部。

一九〇七年（明治四十年） 六二歳。

一月、奥州保田行。療養中の西館武雄を見舞う。

婦人のために（明治女学校卒業生中心）「母の子供会」発足する。会員十人内外。第三日曜日に謙和舎に集まる。夏、かつての寮生布施現之助（東北大学医学部長）を訪ねる。

一九一〇年（明治四十三年）六五歳。

四月、田中正造、謙和舎に泊す。「七十歳にして朝寝を識めらる。」（四月十九日付日記）

一九一二年（明治四十四年）六六歳

六月、田中正造、謙和舎に泊す。「只何事か心清まりて高閑ニすゝむを覺ゆ。」（六月十二日付日記）

※十月を以て毎月発行の『語録』を中止。『投火草』執筆。

一九一二年（明治四十五年）六七歳。

六月、田中正造、謙和舎に泊し、朝與遠の「家庭家訓草」を読むのを聴く。なおこの時、與遠より中村秋三郎を紹介される。中村秋三郎は「谷中村不当買収価格訴訟」の控訴審の弁護士となって身命をなげうって正造の死後、勝訴にあらこむ。

※『同志家訓』『家訓補』執筆。

一九一三年（大正二年）六八歳。

八月、田中正造、病床に臥くを聞き、島田宗三を通じ『静閑讀』を贈る。九月四日、田中正造逝去。その報を聞き一文を草し贈る。

夏、房州の村に牧養経営の原田嘉次郎を訪ねる。篠原無然（二四歳）来訪。

※『名震附存』『静閑讀』『進小録』『不求是求』執筆。

一九一四年（大正三年）六九歳。

篠原無然、飛騨山中隠棲を決意し、與遠に訣れを告げる。その時「十年山人りて自ら立つに至るべし。云々」の一文を紙片に誌し残けとする。

山内内三郎ダンテの『神曲』（三冊）刊行に際し、その序文代りに語録中の文章を呈する。早大教授内ヶ崎作三郎の紹介により岡通（東大医学部）謙和舎に入舎する。

一九一五年（大正四年）七〇歳。

二月、古野周蔵はじめて来訪、三月より金生となる。

一九一六年（大正五年）七一歳。

門下の佐藤在寛、果嶋を去って函館に赴く。高村光太郎、柳敬助より贈られた『讀書讀』に大いに感銘する（大正五年十二月二十日付、柳敬助宛書簡）。

※『教訓自讀』『難録』（一）（二）の執筆

一九一七年（大正六年）七二歳。

金生古野周蔵の結婚に際し、「謹んで新婚を祝す云々」の書を認める。

※『難録』（二）『二十二葉』執筆

一九一八年（大正七年）七三歳。

一月、岡通、東北大学医学部赴任にあたり與遠の許を辞す。それを祝福し、「新年」と題し一文を贈る。なお工藤直太郎、謙和舎々生となる。この年すでに「遺言」を草し、秘匿していた。

一九一九年（大正八年）七四歳。

この年より以後、漢文体を以て書くことが多くなる。

※『大和會讀中』『彦佐録』の執筆。

一九二〇年（大正九年）七五歳。

中村千代松、一家を挙げて入信を決意。與遠より洗礼を受ける。

一九二二年（大正十年）七六歳

病床に臥す。なお久保田正義により口述筆記せらる。秋頃より血管硬化症昂じ、病い重くなる。十二月二日大和会に出席し、つづいて十二月四日、六、七人の者と告別の会を催す。

※『信』『手控書』執筆。

一九二三年（大正十一年）

六月十六日午前六時、永眠。同月十八日遺命に随い、無式を以て蔵前、世田ヶ谷・森蔵寺の墓地に埋葬せらる。

注

① 永島忠重は『新井與遠先生伝』（私家版、昭和四年）では「吳服商」、『新井與遠先生』（與遠伝録刊行会、昭和八

- 年)では「葉種商」としている。林竹二・工藤正三は「洋服商」、寺田清一は「葉種商」。父は興遠の生まれる二年前(天保一五・弘化元・一八四四)に商人伊藤伝在衛門より武士となり新井三郎左衛門安信となっている。母の名は「辰」という。なお父の年齢は興遠誕生時、四二歳説もある。
- (2) 永島忠重は前出の二書によって五五歳説、工藤正三は雑誌『Biblia』一四号、一五号で六二歳説に立つ。
- (3) 工藤正三は三月説、永島忠重は五月説。ただし永島の年譜は久保田正辨の作といわれている。
- (4) この間興遠は陸象山の全集を書写、研究し、また『論語』の注釈なども試みた。五稜郭開城五月十八日
- (5) この東京行で森有礼に金成は会うのである。その金成の紹介で興遠は森と会う。
- (6) この東京行の前の酒宴の席で興遠は例の「東海之濱、有奇男子」という自伝的書の一冊をしたためたのである。そして東京へ行き、森と会い、アメリカへ渡り、三〇年間帰ってこないのである。
- (7) 先の文章では「学生」のことは記されていない。それは永島忠重の『新井興遠先生』によった。今回の資料は寺田清一編『聖言』(私家版、昭和六十年)による。
- (8) 「時によって明いた室の無い事もあった。中略。僅に二人の者が残って居るばかりで、寔に寂しい時代もあった。中略。何時も大抵五六人の学生が居た。」永島忠重『新井興遠先生』六〇―六一頁。

この「略年譜」は工藤正三「新井興遠先生之書き」(五)『Biblia』第一五号(山形Bibliaの会、一九九〇年七月)にある「年譜」と寺田清一編『新井興遠先生「聖言」』に所載の「年譜」に依拠しつつ、永島忠重、林竹二、長野精一、門田明、工藤直太郎、藤一也等の研究や資料、および『田中正造全集』別巻の「田中正造年譜」を参照して作成した。

参 考 文 献

- 1 永島忠重編『興遠廣録』全五巻(興遠廣録刊行會、昭和五年十六年)。
- 2 複製版『興遠廣録』全五巻(大空社、一九九二年)。
- 3 永島忠重『新井興遠先生傳』(私家版、昭和四年)。
- 4 永島忠重『新井興遠先生』(興遠廣録刊行會、昭和八年)。
- 5 永島忠重『野草』(警醒社書店、大正十三年)。
- 6 永島忠重『新井興遠先生の面影と其の談話』(国際印刷社、昭和四年)。
- 7 永島忠重『興遠先生の面影と談話及遺訓』(興遠廣録刊行會、昭和九年)。
- 8 永島忠重『興遠先生講話集』(警醒社、昭和十一年)。
- 9 佐藤在寛『門前院語』(第一印刷所、昭和三十三年)。
- 10 大山幸太郎『真人学概論』(真人学会、一九五四年)。
- 11 『大山幸太郎自伝』(真人学会、昭和五十五年)。
- 12 林竹二『林竹二著作集』二巻、三巻、四巻、六巻(筑摩書房、一九八六年他)。
- 13 林竹二『田中正造その生と戦いの「根本義」』(田畑書店、一九七七年)。
- 14 大久保利謙編『森有禮全集』第二巻(宣文堂書店、昭和四十七年)。
- 15 石川喜三郎編『日本正教傳道誌』書之巻(正教會編輯局、明治三十四年)。
- 16 牛丸康夫『日本正教史』(日本ハリストス正教會教団主教庁、昭和五十二年)。
- 17 ニコライ『ニコライの見た幕末日本』(講談社、昭和五十四年)。
- 18 『田中正造全集』全二〇巻(岩波書店)。

——播本秀史（はりもと ひでし）——

1951年生まれ。立教大学大学院文学研究科博士
後期課程終了（教育哲学専攻）。現在立教大学非
常勤講師。〈著書・論文〉『教育原理』（共著）『教
育の論理としての『否定の精神』』

新井奥邃の人と思想—人間形成論—

平成8年1月20日 発行

著 者 播 本 秀 史
発行 者 神 戸 祐 三
発行 所 株式会社 大 明 堂
101 東京都千代田区神田小川町3-22
電 話 03-3291-2374（代）

© 播本秀史 1996 ISBN 4-470-92020-7 印刷・科学図書/製本・岩佐製本 KT

図本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）する
ことは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センタ－
（03-3401-2382）にご連絡ください。